



中川エコミュージアムの目指すもの

疋田 吉識 (ひきだ よしのり)

中川町エコミュージアムセンター主任研究員



早坂 克章 (はやさか かつあき)

中川町エコミュージアムセンター主事

1 はじめに

上川管内中川町は、北見山地・天塩山地に囲まれた天塩川沿いの山間地に位置し、総面積の約85%が森林で占められる人口約2,200人の過疎の町です。町域には白亜紀の地層が広く分布し、明治期に町内佐久地区のアンモナイトが報告されて以来、アンモナイトやクビナガリュウ、そして恐竜など多くの化石が発見され、毎年多くの研究者・学生そして愛好家が訪れる“化石の里”として知られています。昭和48年と平成3年にはクビナガリュウ化石が相次いで発見され、後者は日本最大(11m)のクビナガリュウとして全身骨格が復元されました。一方、町の85%

を占める森林(汎針広混交林)は、冷温帯と寒帯系の樹種が入り混じる森林地帯であり、自然分布の北限とされるカツラ、アカエゾマツの純林など学術的にも極めて興味深い自然に恵まれています。町内には北海道大学中川研究林や北海道立林業試験場道北支場など森林および林業を研究する機関があり、この分野でも多くの研究者・学生が訪れています。

平成9年以降、旧中川町郷土資料館を中心とした地域調査・研究活動の中で多くの有形無形の自然・文化・生活財産が地域にあることが明らかとなりました。このような地域特性・財産を地域の魅力としてとらえ、町全体を博物館とみなし、マチづくりを進めてい

く「中川エコミュージアム構想」が平成11年にスタートし、平成14年7月には、そのコア施設である自然誌博物館／宿泊型体験・研修複合施設の「中川町エコミュージアムセンターエコールなかがわ」がオープンしました（写真）。中川町エコミュージアムセンターは、廃校となった旧佐久中学校を全面改装したもので、①学術情報発信の場、②学びと交流の場、③地域住民のまちづくり参画の場、として設置されました。本論では中川町の地域財産を活かした「中川エコミュージアム」の展開について紹介します。



中川町エコミュージアムセンター

2 「化石の里」から「エコミュージアムのまちへ」

クピナガリュウのまとまった化石が2体も産出し、世界有数のアンモナイ

ト産地として知られる中川町において、平成9年度には役場企画課に化石の里づくり推進室が設置され、旧中川町郷土資料館で活動を開始しました。化石の里づくり推進室では「化石の里づくり構想」を策定し、化石を地域アイデンティティーとして捉えたまちづくり、その中心施設となる化石館設置についての協議、そして化石を中心とした地域財産の調査が進められました。このような財産を次世代に繋げることが必要な時代を迎えていることをあらためて感じながら、平成10年度に「第4次中川町総合計画」が樹立され、三大プロジェクトの一つとして「化石の里開花プロジェクト」を推進することが決定されました。

地域の方々の様々なご協力を頂きながら進められた化石の里づくり推進室を中心とした地域調査・研究活動の中で、中川町には化石に限らず、多くの有形無形の自然・文化・生活財産が地域にあることが明らかとなりました。このような取り組みの中で「化石の里」や「化石館」というネーミングが、中川町の地域特性を“化石”だけに限定するイメージがあり、化石だけにとどまらない中川の地域財産や中川の魅

力を包括するようにと考えられたのが「中川エコミュージアム構想」です。

エコミュージアム (Ecomuseum) とは、「エコ」と「ミュージアム」をあわせた造語で、エコは、エコロジー (生態学: 生き物の生活や、他の生き物や環境との係わり合いなどを研究する学問) とエコノミー (経済学) のエコです。そして、ミュージアムは博物館という意味です。このエコミュージアムの概念は、1960年代にフランスで誕生しました。時の政府が産業の低迷、過疎化が顕著な地方振興策の一環として1963年から4週間の有給休暇導入を契機に、国民の休息・観光スポットとして地方自然公園 (野外博物館) を設置することにしたこと、国民の間に伝統的建築物保存運動が広がるなど地域文化や生活環境の見直し気運が高まったこと、などが相まって誕生したものです。日本では、エコミュージアムを「生活・環境博物館」、「地域丸ごと博物館」と意識されています。エコミュージアムは、地域丸ごと博物館と見立てて、その中にある自然景勝地、農場、漁場、山林、集落、遺跡などを展示室とみなして住民参加型でつくりあげていく全く新しいタイプの野外博

物館です。このエコミュージアムの概念の注目するところは、住民自らが地域を理解・発見し、地域アイデンティを確立することを第一義としている点です。つまり専門家による資料の収集、保管、展示といったこれまでの博物館から脱却し、住民による参加・取組みを前提とした野外博物館です。このようなエコミュージアムの考え方をまちづくりに活かした取り組みが、日本では1980年代より行われるようになりました。最近ではエコミュージアムの理念による事業を行う市区町村は、構想段階のものも含め約80以上あるとされており、今後も増加傾向にあります。

3 中川エコミュージアム

エコミュージアムを展開していくうえでいくつかのキーワードがありますが、その中でも「地域の魅力づくり」と「住民一人ひとりが学芸員」というのがエコミュージアムの考え方をよく表現しています。「地域の魅力づくり」とは、地域の自然・歴史・生活などの地域特性を住民自らが調査・研究し、日常から地域の魅力を新発見・再発見、そして創造することで、それ

らを次世代や地域外の人びとに継承・普及し、よりよい状態で保全していくことが「住民一人ひとりが学芸員」ということになるでしょう。旧中川町郷土資料館そしてエコミュージアムセンターでは、化石など地質古生物分野調査・研究活動はもちろんのこと、住民、特に昔の中川の様子を知る高齢者とともに地域調査・研究を行ってきました。例えば「昔の暮らしぶり」聞き取りなどの“記憶”の調査や、他館の学芸員などと連携した遺跡調査、古建築物調査、産業調査、旧道調査などです。

これらの調査・研究の成果は広報誌で紹介したり、普及教室で住民自らが講師となって公表したりしています。たとえば、関東圏からの参加が大多数を占める「中川町森の学校」では、北大研究林や林業試験場道北支場の専門職員とともに高齢者や林業グループが講師となり、“都会の人々”に地域の自然・歴史や取り組みを紹介しました。一方、住民との調査で明らかになったアララギ派の歌人・齋藤茂吉が昭和7年来町した際に歌を詠んだ旧道（志文内峠路）は、「茂吉の歩いた昔ながらの道」として整備され、短歌愛好者が訪れたり、地元の学校の総合的な学

習で活用されたりしています。中川町における地域研究（＝地域の魅力づくり）はまだまだ進行中ですが、これまでの地域研究の成果をふまえた「中川町エコミュージアム」概要図を次頁に示します。このように地域を丸ごと博物館とみなして、住民が主体となって創りあげていくエコミュージアムは、博物館活動・社会教育活動を活かした「まちづくり」といえます。

4 中川ふるさと学習プロジェクト

平成14年7月1日にオープンしたエコミュージアムセンターは、平成14年度には博物館見学・宿泊研修などで10,486人の利用があり、また平成15年度は、11,109人の利用がありました。平成16年度のこれまでの実績を合わせると、オープン3年間で3万人近くの人がエコミュージアムセンターを利用したことになります。これまでの特別展や普及事業などの事業展開のなかで“ハコモノ”としての博物館の機能は一定程度達成された感がありますが、まだまだ地域の方々及び地域の学校との関わりは多くありません。このようなソフト面での課題を解決するために

中川エコミュージアムの概要



「中川ふるさと学習プロジェクト」を立上げ、地域協力者や関係機関と連携を取り、地域学習の体制づくりを進めていくことになりました。

「中川ふるさと学習プロジェクト」は、エコミュージアム構想の地域を主体としたソフト面での具体的な展開として位置づけられます。エコミュージアムセンターを中心とし、「ふるさと学習」の幼小中高の一貫した教育過程を、学校教育と社会教育で連携して作成するという取り組みです。「中川ふ

るさと学習プロジェクト」の中で、地域の大人たちが、次世代（つまり児童・生徒）に地域の魅力を伝えていく仕組みを、エコミュージアムセンターを中心として構築していくことが当面の課題です。そのために、現在幼小中高の教諭や社会教育関係者、そして教育委員会職員などからなるプロジェクトチームを結成し、地域の人材・素材を洗いだし、「ふるさと教材」をどのようにそれぞれの学校の教育過程に活かしていくかの検討を行っています。

5 エコミュージアムの展開と住民参加

1)「エコール咲く」

エコミュージアムセンターのオープンに合わせて、その管理・運営及び「中川エコミュージム」によるまちづくりに対して、住民が積極的に参画するために町民ボランティアグループ「エコール咲く」が結成され、平成17年度で4年目を迎えます。

「エコール咲く」とは、エコミュージアムセンター周辺の地名である「佐久」と自らの活動がまちづくりの中で「いつか花咲く」ことを願ってつけられました。「エコール咲く」はエコミュージアムセンターと協力し、地域の持つ良さのすべて（自然、歴史、文化、人など）を、来館者を含めた多くの人に継承し、楽しさ、嬉しさを共有することにより地域に活力を見出していくことを目指す団体で、現在44名（平成17年1月現在）が参加し、宿泊研修の食事の提供、清掃、草刈りなど施設の運営・管理業務にあたっています。また、地元の人々の知恵や技術を多くの人に伝えていく活動も徐々に展開中です。平成16年度には、主に化石・恐竜関連のグッズを扱った「エコール

ショップ」を夏期に試験的に開店し、販売を行いました。館内ではオープン時よりグッズ販売を行っていましたが、購入者の声や売上などをみると、「エコールショップ」は来館者の求めるグッズショップの姿にかなり近いのではないかと思います。ショップ開店は、結果的に住民と来館者（＝町外者）とのコミュニケーション強化につながるという嬉しい副産物が生まれました。



「エコール咲く」の調理班

結成3年目を迎えた「エコール咲く」は、素人集団がそれぞれ資格をとり、手探りのなかで、これまで28団体1,453人の宿泊研修者を受け入れてきました。利用者に少しでも地域を知ってもらうため地元食材を工夫してメニューに取り入れたり、快適に施設を利用してもらうために施設管理を行ったり、行政と連携をとりながらの無我

夢中の3年間でした。今後、会員それぞれが「自己の学びの場」「学びを実践する場」としての「エコール咲く」であり、エコミュージアムセンターであることを再確認することが、ステップアップにつながると考えられます。また組織としても、今まで以上に行政とのパートナーシップを確立し、エコミュージアムのマチづくりに参画するためにもNPOのような対外的にも認知される組織としてのあり方を模索中です。



エコールショップでのグッズ販売

2) 地域博士が地域を伝える

有形・無形の地域財産の「次世代への継承」は、「地域を知りつくした人びと」が行うことが望ましく、学芸員など職員は、そのシナリオづくりとそれを演じる“役者”そして“舞台”を

整えるのが仕事となります。

平成16年には、“地域を知りつくした”佐久老人クラブと教育委員会そして中学校と連携し、中川町では昭和30年代に姿を消した薄荷（ハッカ）蒸溜に挑みました。これは、地域の古産業を文化として捉え、「ふるさと学習」に活かした取り組みです。薄荷の収穫や薄荷蒸溜装置の復元は、当時のことを知る高齢者に協力いただき、また薄荷蒸溜の際には地域博士として生徒にレクチャーも行っていただきました。このように様々な地域財産の「次世代への継承」を地域の人びとがそれぞれの分野の博士となって行う活動を展開中で、化石・森・川・キノコ・薄荷博士などたくさんの博士が生まれつつあります。平成16年11月には、地域博士候補生で、エコミュージアム先進地で



薄荷蒸溜装置の前での記念撮影

ある山形県朝日町などを視察研修し、そのメンバーで地域博士グループが形成されつつあり、“役者”が揃うのも時間の問題です。

6 終わりに

エコミュージアムというとカタカナで非常に理解しづらい言葉かもしれませんが。しかし、エコミュージアムの考え方に特別なことはありません。これまで行政および住民単位で行われてきた地域素材を活かした博物館活動・社会教育活動を「まちづくり」という観点で整理し、有機的につなげていくことがエコミュージアムの考え方に基づくまちづくりになります。しかしながら、エコミュージアムは、「地域活性化の起爆剤」とはなりえません。中川町をはじめ小規模自治体は、地方交付税の削減による財政状況の悪化、市町村合併問題など解決していかなければならない課題が山積みです。これからのまちのあり方は、住民と行政とが一体となって考えていくことはいまでもありません。そのようななかで「エコミュージアム」というまちづくりの手法は、住民と行政が一体となって地

域を継承していく（地域アイデンティティを残していく）ためのまちづくりの一つの手法ということができます。

参考文献

- 1) 新井重三(編)『実践エコミュージアム入門 - 21世紀のまちおこし - 』171p、1995年、牧野出版
- 2) 新井重三(編)『エコミュージアム・理念と活動 - 世界と日本の最新事例集 - 』301p、1997年、牧野出版
- 3) 北海道自治政策研修センター(編)『地域の魅力づくりの戦略を求めて - エコミュージアムによる展開 - 』政策研究シリーズ17、115p(1999)北海道自治政策研修センター政策研究室
- 4) 糸魚川淳二『新しい自然史博物館』229p、1999年、東京大学出版会
- 5) 大原一興『エコミュージアムへの旅』183p、1999年、鹿島出版会
- 6) 杉本尚次『世界の野外博物館 - 環境との共生をめざして - 』254p、2000年、学芸出版社